

	<p>2010年1月15日 第76号</p> <p>発行：いたばし水と緑の会 事務局</p> <p>年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会 http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/ E-mail : mizumidori@nifty.com 〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124</p>
---	---

～「緑と環境」をいかに守るか～

西台公園改修ワークショップに参加して

< >

昨年(2009年)の7月、区のみどりと公園課が、西台公園改修の計画案づくり(ワークショップ)への参加をよびかけるチラシを、周辺地域に配った。

私はこれを見て応募したのだが、2つのことが頭にあった。1つは、西台公園の近くに住んで50年、公園は毎日の散歩コースにもなっていること。2つは、環8の会の「緑と環境」を守る運動と密接な関係があること。私は2002年以来、環8の会の事務局長を努めている。

環8道路ができる前は、西台公園に隣接して同じ程度の面積(7,800㎡)の自然林があった。武蔵野崖線の自然林である。環8(都道)と249号線(区道)が、この自然林をことごとく破壊した。環8の会は、「破壊された自然林に相当する緑地・緑量の確保」を、運動の第1の目標にかかげてきた。緑地確保についての都の回答は、当初の4,000㎡から現在9,500㎡に進展してきたが、高木が育つ平地はその半分ほど、しかも42カ所に分散している。緑量の点では、まだまだ自然林の回復には及んでいない。

また、西台公園に隣接する環8用地に、キンラン(絶滅危惧類)の自生が確認され、キンランを守る運動がおこった。結局、都は、キンランを守るために、工事のやり方を緑化ブロック



環8用地のキンラン(5月)

から直立擁壁に変更し、キンラン保存地を確保した。

ところで、キンラン保存地と西台公園は地続き、公園側にもキンラン、ギンランが花を咲かせた。昨年の5月には、キンラン2本、ギンラン36本が西台公園で確認された。環8の会は、環8用地と西台公園のキンラン・ギンランの「一体的な保護・管理」を再三求めてきたが、都・区間の調整がつかず、未解決のままになっている。

西台公園の自然林とキンラン・ギンランをいかに守るかーこれが、ワークショップに参加した私の思いであった。

< >

第1回のワークショップは8月1日。公園を見て歩いたあと、自由討議をおこなった。ワークショップの参加者は二十数人。

私は、当日の感想を「参加者アンケート」に書いた。参加者はみんなに親しまれる公園にしよう、熱意をもって意見を出し合い、大きな方向ではつぎの点を共有できたように感じた。

武蔵野の崖線の自然と地形を生かした公園。

雑木林の樹木、貴重な草花（キンラン・ギンランを含む）鳥類などの保護。水の活用。

子どもが遊ぶアスレチックの一部復活、お年寄りが安全に散策できるよう通路の整備（手すりなど）

しかし同時に、問題点も感じた。それは、区が何を考えているのか、見えないことである。最後まで参加者の意見にまかせるのか。改修の基本的な区のを考えを早めに発表すべきではないか。

私の疑問にたいして、区側の回答はなかった。

< >

第2回（8月28日）、第3回（9月29日）、第4回（10月30日）とワークショップの検討会はつづいた。あと1回で終了である。

2回～4回までは、おもにABCの3グループに分かれての検討である。この方式では、身近な要望は出しやすいが、「木を見て森を見ない」心配も出てくる。なにしろ、区が基本的な考えを示さないなかでの議論なのだ。

私の心配は第4回目にあらわれた。この日、区は、『改修計画案』を提示した。目を引いたのは、121本の樹木の伐採である。私はおおいに疑問を感じた。「まず道路（園路）ありき」の案ではないか。参加者の間で形成されつつある合意の方向と、ずれているのではないか。

検討のすすめ方についても、司会者（区で



ワークショップの現地見学の様子（8月1日、西台公園）

はなく業者)が結論を急ぎ過ぎているように見受けられた。西台公園の改修は、おそらく半世紀に1回の仕事なのだから、あとに悔いを残さないよう、慎重な検討が必要なのだ。

さらに、「キンラン・ギンランの一体的管理」の問題にも、いたばし水とみどりの会の「要望書」の取り扱いについても、何もふれていない。

< >

ワークショップの最終回は11月26日。区は『西台公園改修平面プラン』を提示した。前回の『改修計画案』とほぼ同じ内容である。

私は『西台公園の改修についての意見、提案』を提出し、みなさんに説明をした。その柱は、「区の改修計画案は、ワークショップ参加者の総意か？」と疑問を投げかけ、「武蔵野崖線の樹林地の価値と保全」について訴え、「慎重な検討を求めます」で結んだ。

私が一番訴えたかったのは、つぎのことである。西台公園は貴重な「崖線樹林地」の一環であり、数少ない区有地である。したがって区は、改修にあたって最初に、崖線樹林地の価値と保全に関する区の政策を、参加者にきちんと説明すべきだったのだ。樹林地と生態系の保全を前提に、みんなに親しまれる公園に改修する—こういう方向性を明示すべきだったのだ。

この点は、私自身の反省でもある。

私が「慎重な検討を求めます」と提案した「ワークショップの期限を延ばすこと」は受け入れられなかったが、「再度の現地調査」については実現することになった。

この日の会議の最後に、区側は“財政難”のため改修予算(1億円)が来年度つくかどうかかわからない、という報告をした。

< >

再度の現地調査は、「現地説明会」として12月18日の午後おこなわれた。それに先だって、区の『西台公園改修平面プラン(最終案)』が送られてきた。

私は12月16日付けで『西台公園改修プラン最終案への要望』を、区に提出した。内容は、樹木の伐採は最小限に、常緑樹と地被類を残す工夫、キンラン・ギンランの保存問題など6項目。

18日の「現地説明会」の住民の参加は11人。区より『西台公園改修計画(樹木)方針』が示された。これによれば、「できるだけ樹木を保全する」「枯れ木は撤去する」「混みあっている樹木は伐採や剪定」「シュロ・ネズミモチは抜根」「管理上支障でも菌根性の樹木はできるだけ残す」など。結局、いまある樹木539本のうち、伐採・移植が129本、残りが410本で、これまでの案と基本的に変わらない。

「現地説明会」は、伐採対象の樹木の1本1本について是非の検討をするのだから、時間がかかる。お互いの話もよく聞こえない。ともかく一回りして、最後に公園の入口付近まで来た。そこに伐採対象のケヤキの高木が3本ある。「切るのはもったいない。残せないか」という話になった。区側は、ケヤキ3本を残すために公園入口の構造を再検討したい、とのべた。検討の結果がでるのは、今年1月の予定である。

さて、3本のケヤキを生かすために、区はどんな再検討案をつくるのだろうか。ケヤキは板橋区の木だ。さらに、来年度予算で公園改修はどうなるのだろうか。2年計画という話も聞く。

(2010年1月 佐藤 政美)

工事中の赤塚ため池を思う

11月からため池の改修工事が始まった。数年前からあった水漏れを修理するための防水工事である。池の水は井戸水を汲み上げて供給しているので、漏水分の補給水もかなりの量になってもったいないと常々思っていたので防水工事が始まってほっとした。今回の工事は公園池として整備されたとき以来の大改修工事のようである。昨年度は見次公園で大がかりなヘドロの浚渫工事があったので、相次いで二つの池の大規模改修工事になる。

折角の改修の機会なので、釣り堀としてだけでなく、自然に配慮した池にしてほしい、見次公園の改修工事にならって、地元住民や利用者や自然保護団体に向けて事業説明会を開き、私達の意見も聞いてほしいとお願いした。説明会は実現しなかったが、現状通りに修理するのではなく、護岸は石積みにして石積みの裏を防水するので、水生生物は石積みの間を隠れ場所にできるという説明だった。

昨年の見次公園改修工事にあたっての説明会では、地元の方達が「見次公園池をビオトープに」と強く要望された。私はビオトープという言葉が普及していることに時代の変化を感じた。見次公園のビオトープは実現しなかったが、区は代替案として浮島を大々的に増やす(池面積の2割)ことを約束した(今のところ浮島は増えていない。財政難で見送り???は困る)。

自然に恵まれた赤塚城址の隣にある赤塚ため池にこそビオトープの視点がもっとほしいところだったので、やはり残念である。

赤塚溜池と湧き水

赤塚溜池は名前の通り赤塚田んぼや徳丸田んぼの灌漑用の溜池だった(写真右、「写真は語る」)。赤塚小学校付近の谷を起点とする湧水の流れが、今は遊歩道になっている浄蓮寺の下を流れ、不動の滝の水や不動の滝の向かい側の湧水を集めて、ため池に流れ込んでいた。戦後は地下水の低下により池も干上がり、昭和40年には水田耕作ができなくなり、昭和43年区立赤塚ため池公園になったという(「いたばしの河川」)。



この辺は湧水の多いところである。15年ほど前、谷の東側斜面(不動の滝につながる斜面)の下は、民家に湧き水池があったり、水がしみ出ていたりし、また不動の滝の隣(今の不動の滝公園)からは水があふれ出ていた。あちこちでサワガニが見られた。

大門地区の区画整理によって地山が削られ、大宮バイパスができ、宅地開発が進んだことなどもあって、東側から湧出する水は、不動の滝のわずかな水だけになってしまった。

しかし、不動の滝の向かい、谷の西側（浄蓮寺下）からは、人知れずまだかなりの水量の水が出ていて、一部は美術館のそばのトンボ池の水源になっている。「人知れず」というのは、マンホールの中にでているからで、マンホールの中をのぞき込む機会は滅多にないので、知っている人はごくわずかだ。が、出てくる湧水の量は、毎分20リットル程もあり、水道の蛇口2つ全開にしたように景気よく出てくるのを見ると、驚きの声があがる。



赤塚公園石垣下の湧水は排水マスへ

またそばの赤塚公園の石垣下にも少ない量の湧水が浸み出しているが、これも公園に隣接する民有地の奥にあり、状況によっては排除すべき困った水という扱いを受けている（写真上）。私達は、どうしたら人知れず出ている湧水にスポットライトを当て、生き物で賑わう板橋区の「看板湧水」として愛され、もっとしっかり湧水を保全する気運を高めていくか、今悩んでいるところなのです（坂本 郁子）。

不動の滝周辺の昔の自然と湧き水とくらしについて お話を聞かせてください

板橋区は武蔵野台地の北端にあたります。赤塚城址と隣の赤塚8丁目の間の谷には、湧き水の川がありました。この川は赤塚小学校付近の湧水からはじまり、途中の湧き水を集め、浄蓮寺下の遊歩道（1990年頃はまだ暗渠になっていなかった）をとおり、不動の滝や向かいの湧水も集めてため池に流れ込んでいました。この流れで野菜を洗い、子ども達はサワガニで遊んだという話も聞きました。今の地形からおぼろげに想像される不動の滝の前の湧き水の流れや田んぼ、赤塚溜池のことなど、昔の自然とくらしについての記憶を残しておきたいと考えています。ご存知の方は事務局瀬田（3969-7124）までご連絡下さい。

活動・観察の記録（2009年9月～12月）

9月19日（土）：光が丘公園すすき原っぱ見学

9月26日（土）、10月17日（土）、11月21日（土）、11月28日（土）、12月19日（土）：
バッタ広場ササ刈等：

10月24日～11月14日：エコロジー講座に参加

12月：自然保護協会の「**生物多様性の道プロジェクト**」にエントリーしました。これは地域でいつまでも大切にしていきたい自然を「生物多様性の道」として登録し、公表し、ずっと見守っていこうという活動です。

武蔵野とススキ (2)

前回書き忘れたが、武蔵野が一面のススキ原だったなどはあり得ない、と既に言っていた人がいる。牧野富太郎博士である。確か何かの講義記録の中であつたとおもうが、氏の全集に収録されているはずである。理由ははっきり書いてなかったと思うが、ススキという植物を熟知している博士にしてみれば当然のことだったのであろう。

私が見たススキ

1950年代から60年代に東京付近でハイキングの経験を持つ方なら、当時のガイドブックにはよく「カヤトの尾根を進む」などと書かれていたのを記憶されているであろう。お月見ハイキングがはやっていたのもこの頃である。高尾山から影信山まで月明かりの中歩いたことがあるが、尾根道ではライトを一切使わず歩いたと記憶している。60年代前半、9月の満月の日であった。当時の高尾、奥武蔵、奥多摩の山は草原が多い明るい山だった。この草原はまさにススキの原であった。人々が森を切り開き、カヤ場として利用していた場所だった。ススキの用途は、この地域に限れば屋根葺きが主なものであったと想像している。茅葺屋根は70年代以降急速に崩れ、ススキの使道は無くなった。現在、カヤトの尾根はヒノキの植林地や雑木の林となり、月明かりだけが夜中歩けるような山ではなくなってしまった。

私が見た最も高標高地のカヤ場は雲取山西方稜線の牛王院平周辺、標高は1700から1800m、ススキの生えるほぼ限界の高さであろう。オミナエシやツリガネニンジンなどがかなり混じった草地で、多分屋根葺き用ではなく採草地として利用したのであろう。下の集落の人が籠を担いで草刈りに来ていた。1970年代半ばの頃、北側に聳える和名倉山の皆伐良がまだ生々しく残る時代であった。

新座市平林寺附近のカヤ場

1960年前後、カブトムシ採りから始まり、昆虫採集などで平林寺に足繁く通った。平林寺一帯が柵で囲まれ、入場料を取られるなど想像もしなかった真のことである。雑木林の真ん中かなり広いススキの原があり、何年もそのままであった。ススキ以外の草花は少なかったが、ナンバンギセルが根元で花を咲かせ、ツノトンボが必ず見つかる場所であった。今思うと屋根葺き用のカヤ場だったのであろう。長野県の本善駒山麓のカヤ場を見たことがあるが、背が高いススキの雑草落で、広くて急な斜面であった。屋根葺き用のカヤ場だったのであろう。

雑木林の縁にもススキ原があつたが、オミナエシやツリガネニンジン、数少ないワレモコウなどが多く混じった草地であった。広い所は採草地、狭い帯状の原は畑の日当たり確保のためだったのかもしれない。伐採は冬に行われていたが、跡地はススキと切り株から出た萌芽が同じくらい伸びていた記憶があるが、当時の伐採後の期間などに興味がもちろん無かった。十分に育った雑木林の林床にもススキが多かった場所もあったが、かなり明るい所だったのであろう。このススキはかつてに生きてきたもので、カヤ場として管理されていたものではなかつた。板橋区の成増に住んでいた元農家の方の話では、雑木林の中に生きていたススキをチガヤと呼び、茎は縄の丈夫で屋根葺きの良い材料であったと言っておられた。

平林寺とはやや離れるが、川越街道が柳瀬川を渡る辺りの河川敷に広いオギの原があつた。カヤ場として利用されていたのであろうか。記憶はあやふやだが、浦所沢バイパスが出来た頃までは残っていたと思う。

赤塚の農家の方の話では、当時は屋根葺き用のカヤ場は荒川河川敷のオギを使っていたとのことであった。権利は現在の戸田市の方が持っておられ、権利を買って刈ったそうで屋根葺きの職人も戸田には多かったと話しておられた。ついでに書いておくが、雨のあたらない屋根の内側には麦わらを使い、外側にオギを使ったそうだ。板橋区の農業統計をまた詳しく調べた訳ではないが、大体は麦類としての数字で、内訳は不明である。私の記憶ではオオムギばかりで、コムギを見た覚えはない。自宅の栄町付近にあった小さな畑でも冬場は大抵ムギを植えていた。

ススキ原は自然に出来るのか

日本の草原は高山帯と湿原のものを除けば、全て半自然のもので人手が関わったものだと大抵の本に書いてある。崩壊地、河川敷にも自然草原は出来るが永續的なものではないという。私が見た尾根筋のカヤ場

平林寺附近のカヤ場も自然に成立したものととは考えられないし、利用されなくなり数十年、全て無くなってしまったのがその証拠である。平林寺のツノトンボが飛んでいけば場所はまだ判らない、雑木林に戻ってしまい一目見たぐらいでは見分けがつかなくなっている。

広大なススキ原が自然に出来るのは、崩壊や噴火跡、山裾の洪水跡なども元の植生が破壊された場所である。普通は数十年経てばススキ原はなくなってしまふ。風で遠くまで飛ぶ種子を持つ植物は、攪乱跡地に素早く侵入し繁栄し、本来の植生が回復すると滅びてしまう種類である。多年生で、大きな株に育つには数年かかるススキも例外ではない。

ススキを見ようとすれば、線形沼や首沼、アユが釣れるような川の中流域である。フナが釣れるような所に生えているのはオギとみては間違いない。最近あちこちで調べてみたが、下流域や池に生えているオギの中にススキが混じっていたケースは見つからなかった。ただし石神井公園ではオギのすぐそばにススキがあったが、混生していた訳ではない。

ススキ原の昆虫

内田正吉氏(2005)によると、現在の関東地方では山地性のバツタとして知られるイナゴモドキが1960年代以前には栃馬区や井の頭、習志野市などで採集され、標本が残っているそうである。氏によれば本種の生息環境はススキなどの背の高いイネ科草本が主体の草原だという。かつて東京附近にも広いススキ原があちこちに存在した証拠だという。氏は同様な昆虫としてキバネツノトンボを挙げている。キバネツノトンボは栗本丹州の虫譜にも載っており、江戸城周辺のものと推測される。本種を私が見たのは群馬県の草津温泉附近のカヤ場で、1980年代後半である。

ギンイチモンジセセリとジャノメチョウも関東地方ではススキと結びついた昆虫である。ギンイチモンジセセリは現在でも多摩川や荒川の河川敷で比較的普通に見られるが、1960年代には武蔵野台地にある雑木林のススキ原にも生息していたと推測される。1例だけだが平林寺で採集したことがある。近年南関東の平野部ではかなり少ない種になってしまったジャノメチョウだが、1960年代の平林寺付近では普通に見られるチョウであった。雑木林に囲まれたカヤ場や林縁部に生息し、近くに林が無く、草原や河川敷では見た記憶が無い。北海道や本州の山地など寒冷な地域では、林の無い草原でも見られるが、南関東の平野部では稀な草原性の種とは言えない。

以上に取り上げた昆虫はイネ科草本が繁る草原に住む種だが、ススキだけが特有な種ではない。分布域の中心は冷温帯だが、日本では暖温帯にも広く分布している(していた)という点でも共通している。氷河期の終了以後、一貫して南関東のススキ原に居続けた昆虫であるとは言えない種であると私は推測している。縄文時代以降、森林の広がった南関東の平野部にはなくなりましたが、人口が増え、森林が切り開かれ草原が増えただけで室町中期以降に、また南関東に戻ってきた種と推定することも可能であろう。この時代は平安から鎌倉期の温暖な気候が終わり、冷涼になり始めた時代でもあった。

氷河期終了以後、南関東の平野は低湿地を除き森林が広がり、草原はほとんど無くなってしまったことを裏付ける昆虫がいる。雌の翅が退化し種加性が乏しくなったフユシャクガの仲間の内クロバネフユシャク(板橋区などに現存)、サザナミフユナミシャク(平林寺に過去の記録あり)の2種は分布の中心が関東地方の平野部で、山地にはほとんど見られない種である。ススキ原であった武蔵野台地に、江戸時代の開発により雑木林が作られたとするとこの昆虫の分布は時期外れである。雑木林が連続して存在する地でなければ分布を広くすることは出来ない種なのである。雑木林が人為的に造成されたものならば、畑も住居地もなく広大な一繋がり雑木林など造る訳はないであろう。

後翅が退化し、飛ぶことが出来ないウロナガオサムシもアオオサムシやマイマイカブリとは異なり、森林の外にはほとんど出ることがない昆虫である。世田谷区や北区、板橋区では現在、絶滅してしまったが記録は残っている。本種は関東の山地、丘陵地にも広く分布する種だが、高々500から600年で武蔵野台地に広く分布を拡大したとは考えづらい。今回書く予定であった黒ボク土壌まで行き着かなかった。武蔵野台地はかつて広大なススキ原であったという説の唯一の科学的な根拠は、この黒ボク土壌の存在なのである。次回には縄文時代の南関東の繁栄と黒ボク土壌について書きたい。(釣巻岳人)

活動のお知らせ

運営委員会は原則として第4土曜日の作業・観察会の後に赤塚ため池公園そばのラーメン「しらかば」で行い、報告や活動内容などを相談します。どなたでもお気軽にご参加ください。午前中の作業の状況で時間が多少ずれることがあります。雨天で作業が中止の場合も運営委員会は開きます。わからないときは、坂本(090-4618-1295)に御連絡下さい。

1月運営委員会： 1月23日(土) 12:30~13:30

3月運営委員会 2月27日(土) 12:30~13:30

会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：3月20日(土) 12:30~

変更する場合もあるので、事務局にお問い合わせ下さい。

活動の問い合わせは事務局瀬田(3969-7124)まで

会では赤塚城址周辺で、私たちが作ったビオトープを中心に自然の変化を観察したり、ゴミ拾いや、ビオトープの環境整備を行っています。観察会は原則として雨天も実施します。

バッタ広場ササ刈等作業と生き物観察、梅まつり準備他ほかいろいろ

1月23日(土) 10:00~12:00

2月20日(土) 10:00~12:00

2月27日(土) 10:00~12:00

3月20日(土) 10:00~12:00

集合場所：赤塚トンボ池(板橋美術館そば)

成増4丁目緑地調査(植生調査)(日程が変わる場合もあるので事務局まで連絡下さい)

2月13日(土) 10:00~12:00 東上線成増駅集合

3月13日(土) 10:00~12:00 東上線成増駅集合

毎月1回の定点観察です。(連絡先)坂本090-4618-1295

環境なんでも見本市(水と緑の会も出展します)

日時：2月6日(土) 7日(日) 展示は10時~16時 会場：エコポリスセンター

梅まつり(水と緑の会も生き物展示・ノコギリ体験と工作コーナーで出展します)

3月6日(土) 7日(日) 10:00~15:00(開始時間は11:00)

集合場所：赤塚トンボ池(板橋美術館そば)ノコギリ台等の準備があるので早めにお願ひします。

あなたも会員になってください(年会費2000円：振込先は表紙に記載)

いたばし水と緑の会の活動はすべて会員の会費によってまかなわれています。主な使途は、会報郵送料、印刷費、ビオトープ池維持管理のための資材費、コピー代などです。